

# 草の芽句会だより

NO,122  
18,10、4

ぼつぼつと句帳に雨や秋の城  
うす雲の天守の聳え薄紅葉

貞子

パラパラと雨ふる萩園空仰ぐ  
局舎工事始まりている秋の音

節子

小雨降る見返り坂の薄紅葉  
白菜の芽の出揃える雨後の畑

純子

秋草の真白き犬の散歩道  
はじまりし桜紅葉の広場かな

範子

お茶の花香りをもちて咲きにけり  
城山に野菊の径見つけたる

剋子

自販機のコーヒころりんぞろ寒  
カーテンで仕切る病室秋灯

禮子

金木犀散り敷き雨の上がりけり  
道の辺のコスモスさゆらぐ朝の試歩

貞

秋晴や讃岐の山のやさしさよ  
草紅葉日毎色増す土手歩く

芳子

出席者 川原 氏家 森 吉崎 小山  
投句者 馬場 真鍋 小林

台風一過、城山はもう秋である。帯曲輪への径は

石垣の崩落事故のため通行止めであったが、大手門広場では菊花展の準備がはじまっている。金木犀が香り、蝟が鳴いている。足元では秋草が小さな花をつけていた。連日台風被害の報道を聞くせいか、見慣れた城山の初秋の風景がことさら大切に思えるのである。小雨の中を局舎へ戻ると、旧営業棟の取り壊し作業が始まっていた。かつて私達の職場があったビルである。高く組まれた足場を見上げ、過ぎ去りし日々を想う。来月は紅葉である。深まる秋を皆で存分に楽しみたい。

